

多元共生のための教育に向け、 現代イギリスから学ぶ先進的研究基盤を構築する

To Construct Advanced Research Perspectives for Pluralistic Coexistence in Education, Learning from the Modern United Kingdom

柳田 雅明
Masaaki YANAGIDA

研究期間

2018年6月26日 ～ 2019年3月31日

研究プロジェクトチーム

柳田 雅明 教育学科・教授
大森 秀子 教育学科・教授
樋田大二郎 教育学科・教授
藤原 淳賀 地球社会共生学部・教授

1. 研究目的

多元共生のための教育に向けた研究の重要性は、青山学院において殊に大きい。そして現代イギリスは、多元共生に向けての教育で世界に多くのことを発信する。かつメソジスト教会が学校教育に初めて取り組んだキングズウッド校（Kingswood School）は、イギリスにある。そこで、多元共生のための教育に向け現代のイギリスと互恵的に学び合い先進的な研究成果を創造しうる基盤を、本研究プロジェクトで構築していく。

土台となる研究活動は、実はすでに継続的に積み重ねられてきた。その場となってきたのが、現代イギリス教育研究会である。その起源は、教育学科教員であった岩崎三郎と今野喜清そして大学院教育学専攻兼任講師であった谷口琢男氏（茨城大学教授）が、当時日本のイギリス教育研究を主

導する一人であった山内太郎氏を招き、大学院生たちそして青山学院出身者たちが集ったことにあ
る。その20年を超え年5回の研究会を続けるネットワークは、他大学出身者をも含め全国さらに現
地イギリスにも広がり50名を超えている。

多元共生のための教育に向け、現代イギリス教育研究会のネットワークを最大限に活かして、豊
かな基盤づくりに至るのには、教育人間科学研究所研究プロジェクトがまさに好適となる。なぜな
らイギリス現地研究者・実践家の招聘によるシンポジウム（学会との連携・共催も可能性も含めて）
などを将来的に視野に入れ、その基盤となる研究を格段に発展させていくことができるからである。
その際、研究プロジェクトチームにはみな、多元共生を視座とする研究に蓄積あることが大きな強
みである。樋田のイギリス在外研修経験とそれを土台とする関連研究も強みとなる。さらに大森の
メソジスト教育研究そして柳田のキングズウッド校2012年訪問調査も、信仰に基づく教育（faith-
based education）の観点から捉えなおしていく際に極めて有効となる。なお、本学部以外の学内
専任教員として、多元共生を考究する神学研究者でありかつ修士（教育学）であって、現代イギリ
ス教育研究会にも20年にわたり加わってきた藤原淳賀（地球社会共生学部・教授）が参画する。

2018年度1年間で目指す到達点は、多元共生という観点での継続的な研究発展に向け、2016・
2017両年度の教育人間科学研究所研究プロジェクトで培った共通基盤をさらにしっかり構築してい
くことであった。

2. 研究内容・計画

以上の研究目的のもと、2018年度は、持続継続的な研究創造を培うための基盤づくりに向け、次
の通り取り組んだ。

研究会は、本年度も4回行い、研究発表とその質疑応答を通じて、多元共生のための教育に向け
た研究の共通基盤を構築していった。その実施は、8月、9月、11月、3月となった。なお、それら
に先行して2018年5月16日に、後藤貞郎氏（元早稲田大学ブリティッシュ・スタディーズ研究所／
元東京都小学校教諭）を発表者として「現代イギリス教育研究会」が行われている。

各発表は、「理論・理念研究」「実証研究」「実践研究」をそれぞれ手法とする中、相互に関連さ
せていくことで発揮される創造性を涵養することとなる。そのため、プロジェクトチーム構成員に
加え、前述の50名を超える現代イギリス教育研究会のネットワークを存分に活用し、最先端を走る
イギリス教育研究者たちを発表者として招いた。

各発表者は、自らの研究者としての蓄積に立脚して、共生社会のための教育に向け自らの知見に
基づき提起をしていく。そのことによって、学び触発され、相乗効果が生じ化学反応が起きていく。
なお、前年度まで、本学専任教員以外の者としてチーム構成員となってきた佐々木毅（国立教育政
策研究所名誉所員／教育思想・教育政策・異文化間教育研究）、菊地かおり（筑波大学／シチズンシッ
プ教育研究）、本学教育学科卒業の飯田直弘（北海道大学／入学者選抜・資格制度改革研究）そし
て本学教育人間科学研究科修了にて博士（教育学）取得の中西啓喜（早稲田大学〔現立教大学〕／

学力と不平等・包摂性に関する社会学的研究)も、プロジェクトチームにおける理論的・実証的研究での内容充実に関して引き続き中核的に力添えをする。

3. 研究活動

以上の研究の目的と内容・計画のもと、以下の各研究会を研究プロジェクトとして4回開催した。

会 議 名 2018年度第3回現代イギリス教育研究会
 [青山学院大学教育人間科学研究所研究プロジェクトとしては第1回]
 開催日時 2018年8月1日(水) 19時00分～ 21時00分
 開催場所 14号館9階第15会議室
 会議議題・概要

次の研究発表およびそれに引き続いての質疑応答を行った。

「権利として保障されるknowledgeをめぐるって

—マイケル・F・D・ヤングを起点とする展開そして援用者による拡張—

柳田 雅明(青山学院大学)

柳田を研究代表者とする2017年度青山学院大学・基盤研究強化支援推進プログラム「知識に基づくカリキュラムを今提起する意味とは マイケル・F・D・ヤングを焦点に」で得られた知見を紹介・検討した。マイケル・F・D・ヤングは、1971年に登場して以来カリキュラムに関する理論研究を世界で主導する一人とされる教育社会学者である。質疑応答において大きな論点となったのは、不利な立場に置かれた学び手にとって実効性ある知識とは何なのかであった。そしてその基盤となる理念をどう原理として形成していくのかであった。意見交換を通じて、日英比較を軸にして得られた知見を多元共生の観点からも参加者6名の間で共有できた。

会 議 名 2018年度第4回現代イギリス教育研究会
 [青山学院大学教育人間科学研究所研究プロジェクトとしては第2回]
 開催日時 2018年9月26日(水) 19時00分～ 21時00分
 開催場所 14号館9階第15会議室
 会議議題・概要

次の研究発表およびそれに引き続いての質疑応答を行った。

「イギリスの教室における歴史学的な探究の実践 —11-12歳の生徒を対象とした過去の解釈性の理解を培う教師の実践に関するケース・スタディー—

菅尾 英代氏 (東京大学大学院)

イギリス (イングランド) における小学5・6年生にあたる学年での歴史授業におけるいわゆる方法知の育成について、その理論的解明を、最新の動向も含めつつ、試みる発表であった。質疑応答において大きな論点となったのは、歴史教育において、知識がどのように構造化されるのかであった。日本のように「社会科」という枠組みを持たないイギリスでの動向・取り組みから、どのような示唆を得ていけるのかを軸としての意見交換を通じて、日英対比から得られる示唆を、多元共生の観点からも参加者8名の間で共有できた。

会 議 名 2018年度第5回現代イギリス教育研究会
 [青山学院大学教育人間科学研究所 研究プロジェクトとしては第3回]
 開催日時 2018年11月21日 (水) 19時00分～21時00分2
 開催場所 14号館9階第15会議室
 会議議題・概要

次の研究発表およびそれに引き続いての質疑応答を行った。

「論争的問題を扱う教師の専門性開発に関する研究—欧州の取り組みに着目して—」

小川 玲氏 (筑波大学大学院教育研究科・大学院生)

価値観などによって見解が異なり論争となるような事象を、積極的に授業で教材としていく際の問題点を、専門性能力開発を焦点にして、イングランドにおける政策推進を題材に検討した。それは、発表者小川氏が、国際バカロレア・ディプロマ・プログラムにおける教育内容とすることを視野に入れてのものであった。質疑応答において大きな論点となったのは、事例として取り上げていた先進的实践について、それらがどのような一般性があるのかであった。結局、広い学問視角のもの的確に位置付けることで、理論と実践があいまって有効となっていくとことが確認できた。以上のような意見交換を通じて、多元共生の観点からも参加者8名の間で共有できた。

会 議 名 2018年度第6回現代イギリス教育研究会
 [青山学院大学教育人間科学研究所 研究プロジェクトとしては第4回]
 開催日時 2019年3月27日 (水) 19時00分～21時00分
 開催場所 14号館9階第15会議室
 会議議題・概要

次の研究発表およびそれに引き続き質疑応答と検討を行った。

「イギリスのポスト16歳教育におけるキー・スキル育成に関する研究」

花井 渉氏 (独立行政法人大学入試センター)

まず、花井氏が研究発表をした。学びを通じて獲得できる有用となる力量について、国を超えて共通となる要素の抽出とそれをめぐる政策推進と実地運用に関して、イギリスでの16歳以降での動向を焦点とした。その際、花井氏は、国際バカロレア・ディプロマ・プログラム（IBDP）そしてまさに科研課題となる同キャリア・プログラム（IBCP）との関係および包摂性の観点も踏まえていた。引き続き、花井発表を題材に質疑応答と検討をした。科研費によって招聘した望田研吾氏（九州大学名誉教授）は関連研究を長年牽引してきた蓄積をもとにまた賈立男氏（北海道大学大学院教育学院・大学院生）は最新動向をまさに探求しているとの素養のもとに、関連知見を開陳しつつ参画した。以上の通りの意見交換を通じて、教育人間科学研究所研究プロジェクトでの多元共生の観点を構築しかつ科研計画における大きな進行為、参加者14名により相乗的な形として展開できた。

さらに「現代イギリス教育研究会」が培ってきた基盤のもと、次の科研費とも相まって成果が出つつある。

柳田 雅明（青山学院大学）「職業・キャリア教育には国を超える制度設計が有効か 国際バカロレアでの展開を焦点に」、基盤研究（B）、研究課題／領域番号 17H02668（2017-04-01 - 2020-03-31）

その科研メンバーには、前出の飯田直弘氏と中西啓喜氏、2019年3月研究会での発表者であった花井渉氏を含め、8人体制で研究組織が編成されている。科研費が応募時の満額が配分されることのない中、教育人間科学研究所プロジェクトとの相乗効果によって科研費の研究計画自体も本来あるべき形で可能となったことを、是非お伝えしたい。

4. 総括と今後の展望

「多元共生のための教育に向け、現代イギリスから学ぶ先進的研究視座を構築するために」、この「教育人間科学研究所プロジェクト」が何をどうできたかについて示したい。予定の4回の研究会が、遠方の研究者2名も研究会参画者として招いて充実した形で実施できた。そして、青山学院大学2017年度基盤研究強化支援推進プログラムそして科研費ともあいまっての充実した研究活動もできてきていると認識する。

学術的成果物としては、次の学術誌論文が2018年度に公になった。

- ・柳田 雅明. 2018. 「日本での生涯学習がグローバル化とどうつながるのか: OECDによる取り組みと地域での生涯学習から考えてみる」『日本生涯教育学会年報』 39: 35-54.

また、次の学会発表も、本プロジェクトと関連してできた。

- ・柳田 雅明（青山学院大学）、中野和光（美作大学）、志村喬（上越教育大学）、本田伊克（宮城教育大学）、森岡 修一（大妻女子大学）「カリキュラム理論におけるpowerful knowledge—その歴史的背景そして展開・拡張—」（2018年7月1日 日本カリキュラム学会第29回大会 会場：北海道教育大学旭川校）
- ・柳田 雅明（青山学院大学）「カリキュラム論は、社会学（sociology）の名の下どこまで可能か—近年のマイケル・F・D・ヤングをめぐって—」（2018年9月3日 日本教育社会学会第70回大会 会場：佛教大学）
- ・柳田 雅明（青山学院大学）、御手洗 明佳（淑徳大学）、飯田 直弘（北海道大学）、花井 渉（独立行政法人 大学入試センター）、中西 啓喜（早稲田大学）、赤塚 祐哉（早稲田大学本庄高等学院）「職業・キャリア教育には国を超える制度設計が有効か—国際バカロレア・キャリア関連プログラム（IBCP）における展開—」（2018年9月8日 日本国際バカロレア教育学会第3回大会 会場：岡山大学津島キャンパス）

以上の成果は、まさに「教育人間科学研究所プロジェクト」が構築した視座に支えられたものとなっている。

今後の展望としては、まずなによりも2019年度教育人間科学研究所研究プロジェクトとして「多元共生を持続可能にする教育のため、相乗的学問知を創発する 現代イギリスを軸に検討する熟議を通じて」を採択いただき、さらに発展させた形で研究活動が継続できていることもお伝えしたい。それも、以上の通り2018年度までに「研究基盤を構築する」ことができたからである。